「名優は後姿で演技ができる」

——宮城まり子の言葉——

教育者として何を受け止めるかは
その人の心の振幅によってきまる。

愛知教育文化振興会理事長
佐藤　玄彦

（はぼたん　六名小）

昭和49年1月1日
編集・発行
岡崎市教育委員会

教育随想

小心非礼

鈴木勝忠

すでに、新年号に非礼と題することからして無作法で非常識を賞められよう。小心にして無作法、馬令五十をかぞえてなおこの状態では救いようもあるまいが新年の所信をのべ、高邁な挨拶でもできればそうしたい気持はあっても、わたしに挨拶はにが手である。「我が校の方針は、生徒の主体性を重んじ創造力をのばし」「よく遊びよく学び、世の中のためになる人になりましょう」――およそ、挨拶とは、わかり切った大義名分とタテマエを、何の憶面もなく堂々とのべることのようである。小心で正直なわたしは、それを思うだけで話す気力を喪失する。学長の祝辞や結婚式のスピーチが、変わりばえしないように、とくべつにすぐれた話柄がころがっているものでもないし、キマリ文句をしゃべるのなら、テープの方がましではないかと、気恥しさに赤面してしまう。しかし、無情な教育界は、タテマエとしての挨拶の場を強要し続けるのである。その本心のほどはわからないが、自信にみちあふれ、微笑をうかべて挨拶する人の顔を、わたしは化け物だと思う。わが身に引きくらべて、という発想自体が、語るに落ちたと憫笑を招くものであろうが、その中に、やはりウソがあるという白々しい気持が先立つためである。あえてそれをしなければならないため、次第に馴らされ、それを当然のこととして繰返す、猿廻しの猿のようにも思えてくる。きわめて低次元の定義が許されるならば、自信とは、政治家が国民の皆さんと呼びかけるのと同じく、等しなみに数として人をとらえる傲慢さと、どうせ同じようなものだという馴れの二つから生まれるもののように見える。質を見ようとせぬ反教育の極を示すといってもいい。同じ教材を二度扱えば、それだけ自信ができたと思い込むのは、相手を単一なものと見る自己満足に過ぎまい。同じ所に同じ洒落を入れて笑わせることが、相手は変って初めてだと知りながら、うしろめたくてうまくできなかった。それほど、いつも自信のもてないわたしは、自信にみちた人たちの充足した足どりをうらやみ、それを虚像だとおとしめることによって、みずから慰める習慣を作って来た。行い澄ました高名の老尼が、その往生は美しかろうと集って来た信者の前で、魔羅が来る、とうわ言を繰返したという中世の笑話は、これを笑い切れる人の無いことを知った上での記録であろう。虚像としての挨拶は、秩序のための潤滑油ではあるが、それ以上の力をもつものではない。金もうけと個人の幸福のみを追求する時代思考の中にあって、タテマエ論がいかに無力であるか。経済成長の潤滑油の輸出制限による油切れは、トイレットペーパーを買いあさる赤裸々な人間の姿を顕示した。タテマエに身を寄せて肩を張って生きるよりも、小心翼々、俗は俗なりに、みずからに忠実でありたいと思うのみである。

（岐阜大学教授）

いまはむかし

正月あれこれ

●創意工夫の下駄スケート

寒さが厳しくなると、夕方、校舎の裏へ水をまいておく。朝になると、みごとに凍っている。下駄を横にして足にしばりつけて、よくすべったものだ。正月になると、いつも思い出す。

●正月といえば旧正月

農家ではまだ米俵が家中、所狭しと積まれ、正月どころではない。俵の上にまたがって、兄が学校でもらってくるまんじゅうを待ったものだ。

旧正月が近づくと忙しい。とくに「おおつごも」は、もちをかざり、畳を敷き、夜おそくまで大そうじ。

●新しい着物

朝になると、たんすからきれいな着物を出して着せてくれる。新しいたびや下駄もはかせてもらえる。日頃ほしがっていた大きな手まりなども買ってもらえる。男の子も「こんがすり」の着物にはおりで、すぐによごしては叱られたものである。

歳旦句抄

浅井浚一

去年今年貫く棒の如きもの　虚子

除夜の梵鐘のひびきを心静かに聞くとき、汪然と年を送り年を迎える荘厳さを感じる。

去年今年という言葉も、今日では俳句のほかには、ほとんど使われていないようである。一夜明ければ新しい年。きのうはすでに去年であり、今日はたしかに今年である。ひびき来る除夜の鐘を境に年去り年改まるという、時の微妙な推移に感慨を深くせざるを得ない。去年今年の言葉の中には、そうした思いが深く込められている。逝く年をふりかえり、新しい年に思いを走らせるというのである。

今の世の中は、さらにテンポの速さに追われ、こうした思いは脳裡をかすめる暇さえ掻き消されそうである。

高浜虚子は、この思いを「貫く棒の如きもの」と表現した。小ざかしい人間のいとなみに対して、天地自然の悠久なすがたは、たしかに棒のようにたくましい。私たちの周囲をとりかこむ社会の動向というものにも、もはや個人の意志ではどうにもならない巨大なものを感じ、これに対しての人間の微小さへの達観が秘められているようである。

夜風添う簫の火の粉初詣　風生

神慮いま鳩をたゝしむ初詣　虚子

去年今年の感慨は、初詣に引きつがせたい。それは己れ自身に立ちかえらせることのできるひとときでもある。初詣は元朝の未明がいちばん素晴しい。鎮守の社や恵方にあたる社寺に詣でる。何といっても奥まった木立の参道を歩むにしくはない。ざくざくと鳴る玉砂利が神苑にこだまとなって鼓膜に伝わってくる。信州では初詣を初庭と言って、元朝早く産土神に詣でるが、その神の祭場を庭と称した。たしかに初詣の森厳さは神域にはじまる。

星一つ手にいただくや初手水　潤子

初水で手や顔を洗い浄め、心を清める。あくまで澄んだ水にきらめき写るのは、まぎれもなく天の星である。神のひかりは闇を通し、わが手の中に宝石のように輝いている。

若水のけむりて見ゆる静かな　鬼城

初手水の水は若水である。手の切れるような冷たさは、心を鎮め浄ませる。元朝に汲む若水は、神聖なる力を宿すとして、本来は年男の役とされ、若水汲みは大事な行事とされた。三が日は年男が未明に起き出て水を汲み、火をつけて炊事をなし、女は一切このことに触れなかったという。ともあれ、心鎮めてこの若水で、書や絵をものにしたいゝ、ふと思う。

やがて元旦の、ほのぼのと射しくる昧爽の光が参道の杉の鉾先をゆるめはじめる。初明りであり初茜である。まだ日の届かぬ日影も初日影とよばれ、年改った感懐は清く森厳な気を深くさせる。

初空や一片の雲輝きて　草城

波の上をはしる波あり初明　黒潮

初詣も自宅近くにさしかかると、初明りは小高い木々を染め、空をくれないから蒼さへと彩を移していく。それは、おかしがたい神秘さ、悠久なる自然の生命のようである。

初日さしわが家に神の現れ給ふ　浚一

（え・浅井浚一）

●しきたり

五時に起こされる。家族全員冷水で身を清める。祖父が門口に塩をまく、神仏にお参りをし、日の出を拝んで、年頭の所感をひとりひとり述べる。これができなければ、おぞうにを食べさせてもらえない。元日はほうきを持ってはいけない、反物を入れてはいけないというしきたりもあった。

戦争が激しくなると、正月どころではなかった。「戦地の兵隊さんのことを思え」「欲しがりません勝つまでは」でじっとがまんの子でなくてはならなかった。

●ないないづくし

食糧不足、一きれのもちを争った時代。竹をけずり古新聞をはり、たこを作る。木を切り、なたでこまを作る。乏しい糸をつないでお手玉を作る。竹馬ではんてんを引っかけて破り、こごとを受けたりした。

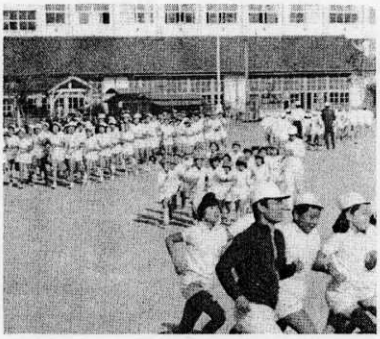
●外地での元旦

教年前、ローマで迎えた正月。ホテルの食卓に日本の国旗と「あけましておめでとうございます」と書いたのぼり、思わず胸にジーンときた。

岩津小学校長竹内先生はじめ、次の方にお聞きした。梅園小・島田、鶴田、井田小・岩瀬、竜海中・小久保、愛宕小・鳴戸、岩津中・杉浦の諸先生

業間体育

六ツ美南部小



（足並みも軽く）

清澄な大気の中、軽快なメロディが流れる。クラス毎に円陣ができ、ごく自然に準備運動が始まる。曲が変わったかと思うと、さっとかけ足にうつる。すぐに列がピシッと揃う。

手の振り、足の運び、ムリのない姿勢一糸乱れず、みごとというほかはない。三周して正常歩一周。肩の高さまで振られる手、すっくとのびたひざ、堂々たる歩きぶりである。

さらに八周のかけ足。高学年は一周一六〇メートルのトラックを五五秒で走る。かなりのスピードだが全然ペースがくずれない。いかにも鍛えぬかれたといった感を受ける。

このあと遊具による運動をして終わる。

「はだしで安心して走れる運動場づくりをまずやりました。貧血で倒れる子など一人もいませんね。病気で休む子もほとんどなく、出席率が全校平均九九・五％（47年）ですよ。黙って走りぬくということによって、体力ばかりでなく、社会性まで伸びてきたことは、わたしたちの期待以上でしたね。」

山内校長先生はこのように語った。

（編集部）

理科クラブ

河合中

「以前は、与えられた仕事だけをやるという状態でした。今では、自分たちがやらなくては、郷土の自然は守れないという意識でやってくれます。」古田忠久先生の熱っぽい口調が、底冷えのする螢飼育場に響く。クラブ員二十三人（男二〇女三、部長原田隆志君）の結束は堅い。年間を通して活発に活動がくりひろげられる。

室内飼育の螢、約一五〇〇〇匹、幼虫

（寒さもふっとぶファイト）

スポーツ少年団

福岡小

福岡学区スポーツ少年団は、今日も、校庭の寒風すさぶ中で白球を追っかけ回っている。紅潮したラグビー部の童顔には寒さなどない。講堂では、胴着一枚に身を包み、快い竹刀の音をさせて剣道部がたくましく活動を続けている。

本校八月福岡学区では、地域の方の暖い理解によりラグビー少年団、剣道少年団が結成された。よい指導者に恵まれ、四〇名のラグビー少年、六〇名の剣道少年が誕生し、引続いて十一月にはサッカー少年、バレーボール少年も発足し、競って練習に励んでいる。

もともと福岡小学校は、校訓に「不屈の精神」「からだを鍛える」をかかげ、具体像を示して常にその実践に務めているが、このスポーツ少年団の活動をとおして校訓はいっそう生かされつつある。また、子どもたちは、体をぶっつけ合って、深い友情を体得しつつある。土曜、日曜日の午後ユニホーム姿のかけ声は校舎に明るくこだまする。この子らの前には冬はない。

開校百周年の記念の年に生まれたスポーツ少年団に、学区はこぞって大きな希望を託しその成長を見守っている。

（福岡小　黒野喜美）

の成長状況観察、河川の蛍との比較、給飼、飼となるカワニナの養殖など仕事は多い。対象が生き物であるだけにきびしい活動である。飼育槽の石の下に、幼虫がじっとしていた。

たいへんなのは、河川での幼虫調査だ。来年成虫からの発生予察を、学区内二〇箇所余りの地点で行う。石を持ち上げ潜んでいる幼虫を観察する。五分も水にはいっていれば、手はまっ赤にはれあがる。たき火で暖をとっては行うという。血のにじむ活動は、日曜日を返上して行われる。なお、野鳥の保護観察も継続しているとか。

源氏蛍を中核とし、自然保護全般にわたる活動は、冬といえども、休む間もなく展開されている。

（編集部）

（冷たい水の中、幼虫調査）

詩武道クラブ

美合小

「冬のけいこは、からだがしまって気持がいい。」

「からだがあつくなってきて空気が冷たいのはいい気もち。」

冬を迎えた部員の感想である。素足に感じる床の冷たさは、励ましの言葉のように部員の心をひきしめてくれる。

十二月以来、毎朝始業前の十五分間、体育館に集まる顔は明るい。これを寒稽古といってよいだろうか。

作品としてステージで舞うこともあるが、稽古は、作品だけが目的でないことをひとりひとりが膚で感じるひどときである。

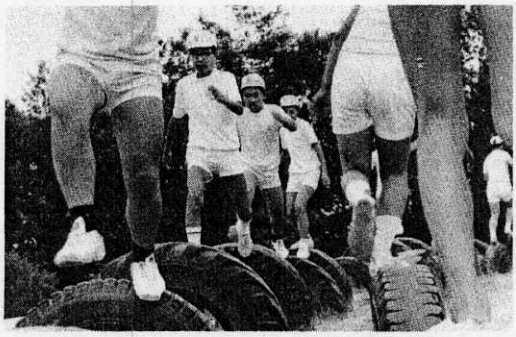
（美合小　河合　充）

「エイッ、ヤアッ」「エイッ、トウ」

朗々と流れる吟詠につれて、鋭い気合が飛び、体育館の床が鳴る。

刀を振ると、館内の凍てついた空気がピンッと音を立てて迎えてくれる感じ。冷たい空気も、気合いと刀の動きでたちまち激しくゆれ動き、まもなく部員のからだを暖かく包んでしまう。

（気合じゅうぶん）



（からだのバネをつくるタイヤとび）

甲山サーキット

甲山中

甲山サーキットトレーニング場に冬がきた。きびしい冬の寒さに、斜面を利用したサーキット場は中学生を鍛える最良の場所である。

「ピーッ」と鋭い笛がひびくと、トレパン、トレシャツの白の一群が斜面にとび出していく。たちまち冬枯れの芝生の下に消える。斜面途中の広場で先頭がタイヤとびを始める。低鉄棒で連続さかあがりをするグループ、腹筋運動に顔をしかめるグループ、木馬をとぶグループ、雲梯に生徒が孤をえがいてゆれる。梯子をかけおりてはん登棒へ登る。いよいよ最後のコースだ。苦しい息をはずませて坂道をかけ登る。ゴールイン。一周三百メートル。起伏に富んだコースは脚力をつけるのに最適である。正課体育はもちろん、クラブ活動、部活動や自主的トレーニング場として冬中大にぎわいである。

「鍛える」ということは限界に挑むことである。厳寒の甲山サーキットは中学生を鍛えるに絶好の場所である。

（甲山中学校　山内　満）

美しき誤解

外山滋比古先生の講演から

ことばの教育で重要なことは目の前に見えることばかりでなく、抽象の世界を教えることです。目に見えるものしか教えないのでは、知能の発達はおくれてしまいます。

ここに三という数と二という数があります。これをたすと、五になる。おとなからみると、きわめて具体的のようですが、子どもにとってはわかりにくいんです。

バナナが三本あります。二本もらいました。何本になったでしょう。こういえばすぐわかりますが、三とか二とかいう数は抽象であり虚なんです。

ここがわかるためには、おとぎ話がわかっていなくてはなりません。おとぎ話、これはうそなんです。うそのことばで、存在しないものに対する理解を深めるのです。

目の前に桃太郎はいないけれども、いるような気がする。リンゴのない国というのは絵では表現できないが、ことばでは表現できます。言語による否定のことばとか、存在しないことに対することを、いちばんわかりやすく肌で感じとらせるのが、おとぎ話です。

このおとぎ話を、うまく教えますと、小学校段階の算数は、必ずできるようになるはずです。逆にいうと、小学校で算数のできないのは、おかあさんがおとぎ話をいいかげんにやっていたということになります。

国語と算数の才能は別であると考える人がいますが、実はもとはいっしょなんです。

学校で、子どもを伸ばす唯一の方法は、「ほめる」ということです。叱るということも、もちろんだいじですけど、叱って伸びる子は絶対にないのです。

したがって、先生はいかにして適当な時に、適当な点をほめるかということに非常な努力をしていくべきだと思います。

これは小学校から大学まで、一貫しておりまして、人間がほんとうに伸びるのは、先生から思いがけない時に、自分の長所というものを認めてもらって、君はやればできるんだといわれた時に、自分の意識しないような元気も出てくるものです。

子どもは、欠点を直すことによって、決して長所は伸びませんけど、長所を伸ばすことによって欠点を直すことは、可能なんです。

できるだけ子どもに自信をもたせるため、先生は一か所くらいはいい所を見る目があって、あの子はこの学科ではできないんだが、あそこはできるとか、あれはこういう所がいいということを見ることによって、子どもが、先生は自分の方に心を向けていてくれるなと思います。

そういう信頼感ができますと先生のいうことが、非常にすなおに心にしみるようになります。

もちろん子どもですから、甘やかすと増長しますので、そういう時は厳しくチェックします。

しかし、全体として、あの先生は自分のことを心に思っていてくれるということを、四十人の子どもがみんな錯覚をもつようになれば、非常にすぐれた教師といえます。

錯覚でいけなければ誤解ともいいましょうか。先生は、自分に特別な気持ちをもっていてくれるということが、「ほめる」ことによって感じとられれば、それがたとえ誤解であってもよい。美しき誤解の上に花が咲いて、いつのまにか学校が好ましく、楽しくなっていくものです。

昭和四十八年十一月十一日
婦人会館にて
（文責　東海中　高木　義和）

図書紹介

ことばの習俗

外山滋比古
三省堂　250円

「ことば」をとおして教育に当たっている私たち自身、「ことば」を大切にしていないことに気づき、考えさせられる本です。

現代社会に「ことば」の果たす役割がどんなに大きいか。摩擦と対立を消去して、いかに人間関係を円満にするかが、著者の視野の広さと、社会への深い洞察力でわかりやすくのべられています。

（岡崎小　萩野篤子）

十二支――郷土頑具から――

斎藤良輔
朝日新聞社　1000円

郷土頑具は、絵画工芸品というような表通りに並べたてるものでなく人知れず家の片隅で静かに鑑賞するもののような気がする。江戸時代から庶民の間でもてはやされ、年が改まるたびに干支のおもちゃを、机や棚に飾って新年を味わう心には、いちばんふさわしいものであろう。

土くさいふるさとの心を、この本から味わうことができた。

（藤川小　三貝　皇）

おしらせ

【刊行あんない】

●開校百年誌「心のふるさと」
秦梨小

●根石小学校百年史

●矢北百年　矢作北小

●大樹寺小学校の百年

十一、十二月中に相次いで行われた百周年記念式を機に刊行されたもの。それぞれの学校、地域ならではの資料を集め、編集にも個性があり、見ても読んでも懐かしく貴重な資料。

●クラスのうたごえ　第七集
甲山中学校

創作指導から生まれた学級歌をまとめたもの。指導の手も行き届き、編集にも創意がある。

全国的レベルの受賞表彰相次ぐ

―うれしい研修・研究の成果―

本年度の重点目標である研修研究の充実をめざして各校、各組織で活発な実践が続けられているが、その成果が認められて二学期末には、全国的な規模の大会、審査での受賞が相次いだ。

●第四回博報賞（国語教育部門）受賞校に梅園小学校

視覚障害教育、聴覚障害教育および国語教育部門の三部門における全国的な水準の実践校を表彰するもので、十一月二十四日東京の博報堂本社で受賞。

昭和四十一年以来、国語科の各領域の実践に取り組んできたが、なかでも言語要素の具体的究明を基盤とした教材研究、作文指導などにおける努力が高く評価されたもの。ちなみに、同校は、本年度「言語活動を基盤とした考える学習の追求」を主題に研究発表をした。

●全国英語スピーチコンテストに甲山中藤田教諭入賞

国際教育振興会主催、文部省後援のこのコンテストは、十一月二十四・二十五日の両日、東京の日米会話学院に全国の中・高英語教師のベテラン、つわもの多数を集めて行なわれた。

藤田教諭は第一日の予選を勝ち抜き、十五名の通過者とともに第二日の決勝に進出、ここでも堂々の弁論の結果入賞五名の中に選ばれたもの。すぐれたスピーチの能力はもちろんだが、中学生による河川美化運動をとりあげて「ミカちゃん、そのエサは食べないで」と題したその内容が好評を呼んだという。

●野鳥の保護活動で文部大臣賞
河合中学校

ゲンジ蛍の保護、飼育を中心とした自然環境保全活動に成果をあげている河合中が、またまた十一月二十六日、東京での野鳥保護実績発表大会で晴れの文部大臣賞を受賞した。

今回は、ゲンジ蛍とともに、植生や鳥獣の循環的生態研究をめざし、生態系の中での自然保護のあり方を求めて実践した理科クラブ生徒のめざましい活躍が評価されたもので、「緑と太陽の町づくり」にふさわしい朗報といえよう。

■自作8ミリ映画「緑と清流の町づくり」完成

現職教育社会科部会と視聴覚教育部会の共同制作による―市役所のしごと―「緑と清流の町づくり」が、約半年の歳月を費して完成した。また、理科部と視聴覚部との共同制作による「岡崎公園の植物」も、すでに編集の段階にはいっており、近く完成予定。

これらの自作8ミリ映画は、郷土学習の資料不足に悩む現場に応えて、小学校の教材用にと制作されたものだが、中学校でも「河川美化運動」の指導教材として活用できるもの。

■またも特殊学級へのご厚志

図書のご寄贈、遠足へのご招待等、特殊学級へのご厚志が相次いでいるが、十二月二十六日にはまたも竜城ライオンズクラブから図書十万円分のご寄贈をいただいた。師走に心温まる朗報。

■昭和48年度教育論文応募状況

種別		小学校 個人	小学校 共同	中学校 個人	中学校 共同	計
教科	国語	15	3	4	5	27
	社会	18	9	4	6	37
	算数・数学	5	3	4	5	17
	理科	13	2	2	3	20
	音楽	5	2	1	2	10
	図工・美術	0	1	0	0	1
	体育・保体	7	3	0	3	13
	家庭・技家	2	0	4	3	9
	英語			4	3	7
教科外	道徳	3	0	0	0	3
	特別活動 生徒指導	15	3	5	2	25
	保健・給食	1	1	1	1	4
	学習指導法	3	5	0	1	9
	特殊教育	3	2	0	0	5
	教育全般 その他	4	4	0	2	10
合計		94	38	29	36	197
備考		※過去4年間の応募状況 44年－133点　46年－165点 45年－132点　47年－227点				

1月の行事

日	曜	行事
1	火	新年交礼会（市民会館） 第19回新春マラソン（公園グランド）
2	水	
3	木	岡崎市民新春ラグビー交歓会
4	金	官庁ご用始め
5	土	
6	日	
7	月	
8	火	第3学期始業式
9	水	就学児健康診断の取扱い研修会(医師会館)
10	木	定例教育委員会
11	金	校長会（市役所）
12	土	
13	日	三河東西対抗総合室内ハンドボール大会（城西高） 岡崎市剣道選手権大会（市民体育館）
14	月	
15	火	成人の日　　成人式（市民会館）
16	水	
17	木	市小中学校書初め展（20日まで美術館）
18	金	東海中学校研究発表会
19	土	
20	日	市こども会指導者研修会（東部・北部ブロック） 市民駅伝競走大会　　（県営グランド）
21	月	
22	火	
23	水	
24	木	教育委員学校訪問（美合小・岩津小）
25	金	
26	土	
27	日	
28	月	
29	火	
30	水	
31	木	

窓

教育機器

加藤　義夫

TPに図を描き、色文字を書く。その影に子どもの見つめる顔が浮かぶ。驚きとささやきが流れる。TPづくりの楽しさがここにある。

OHPの活用にともなって、その位置づけに全神経を注ぐことは大切である。

単なる提示や解説では活用といえない。子どもの目が輝き、全身に溢れる感動が、一つの画面から滲み出ることが必要である。

学習は、常に感情への刺激とゆさぶりが要求される。機器の活用は、これを容易にした。容易なるが故に慎重でなければ、効果はない。機器活用は、子どもの思考の深まりと広がりを育てる有効な手段の一つである。

人は人によって教育される。子どもの目は純粋である。感覚は素朴であり、感受性に富む。機器の活用を進め豊かな情操と柔軟な思考を持つ子どもにしたいと年の初めに思う。

（矢作北小）

編集後記

●…あけましておめでとうございます。

油不足に始まり、あれもないこれもないという年の瀬を送り七十四年の新春を迎えた。読者諸子と共に健康と幸をよろこびたい。物価高と物不足は不自由ではあるが、人の心の世界に新しい眼が向けられることであろう。

また可とすべきか。

●…お正月がすむとすぐ三学期だ。三学期は一年の総仕上げであり、子供たちを厳寒の中に鍛える時でもある。冬に鍛える子供の姿を特集した。

●…鍛えるとは「身」「心」を鍛えるのだ。獅子は、子を千仞の谷に蹴落とすという。豊かな環境の中で「もやしっ子」を育ててはならぬ。

●…年の初め、岡崎の子供たちのすこやかな成長を祈ろう。

●…今月のカットは六ツ美北部小の鈴木幸子先生にお願いした。